



Topics 1

患者会・市民の活動が 予防接種制度を動かす

2025年9月26日、WHO（世界保健機関）西太平洋地域事務局は、日本が風しんの排除状態にあると認定しました。風しん排除とは、国内で風しんウイルスの持続的な感染が3年以上確認されなかったことを意味します。これは、2019年度から6年間にわたる追加的対策、学会等の働きかけ、医療者やメディアを巻き込んだ患者会の粘り強い活動の賜物でもあります。今回は、日本の予防接種制度を動かす力となった患者会や市民の活動を振り返ります。

CRS児の母の思いが風しん対策を実現

風しんは、妊娠初期に感染すると胎児に深刻な影響を及ぼす感染症です。とくに先天性風しん症候群（CRS）は、目や耳、心臓などに重い障害を引き起こすことがあり、家族に大きな負担をもたらします。国は2004年に「風疹流行および先天性風疹症候群の発生抑制に関する緊急提言」を取りまとめましたが、予防接種の空白世代への対策が不十分なまま、2012年から2013年にかけて再び大規模な流行が起こりました。2013年には全国で1万6千人を超える風しん感染者が確認され、CRSの報告も45人にのぼりました。

この事態を受けて、CRS児の母親たちが中心となり、患者会「風疹をなくそうの会『hand in hand』」が立ち上がりました。「もう二度と、同じ思いをする家族を増やしたくない」——その切実な願いを胸に、メディアへの働きかけや厚生労働大臣への要望書提出など、粘り強い活動を続けました。



こうした患者会の声が政策を動かし、2019年には風しん追加的対策（第5期定期接種）が制度化されました。接種機会のなかった年代の男性を対象に、抗体検査とワクチン接種が無料で提供される制度が始まりました。そして、2025年9月、WHO（世界保健機関）により日本が風しん排除国に認定されるに至りました。

予防接種制度の改善と患者会活動

風しんだけでなく、これまでに様々な患者会の活動が日本の予防接種制度の改善に貢献してきました。代表的な事例をご紹介します。

細菌性髄膜炎の予防ワクチン導入と定期接種化

肺炎球菌による髄膜炎を発症し重い後遺症を抱えたお子さんをもつ母親が、「日本では未承認のワクチンを欧米では接種できる。細菌性髄膜炎は防げる」と知ったことをきっかけに、2006年に「細菌性髄膜炎から子どもたちを守る会」を立ち上げました。署名活動や厚生労働大臣への要請を重ね、2008年にヒブワクチン、2010年に肺炎球菌ワクチンが発売され、2013年には定期接種化が実現されました。

ポリオワクチンの安全性向上への働きかけ

世界では安全性の高い不活化ポリオワクチン（IPV）への切り替えが進む中、日本では長らく生ポリオワクチン（OPV）が使われていました。1995年から活動をしている「ポリオの会」は、定期予防接種の生ポリオワクチンを安全な不活化ポリオに切り替えるように強く訴え、2012年に制度変更が実現しました。

主な予防接種制度の変遷	
2008年	ヒブワクチン発売
2010年	小児用肺炎球菌ワクチン発売
2012年	不活化ポリオワクチンへの切り替え
2013年	ヒブ・小児用肺炎球菌ワクチン定期接種化
2014年	水痘ワクチン定期接種化
2015年	「麻しん排除」認定
2016年	B型肝炎ワクチン定期接種化
2019年	風しん追加的対策（第5期定期接種化）
2020年	ロタウイルスワクチン定期接種化
2022年	HPVワクチンキャッチアップ接種開始
2025年	「風しん排除」認定

HPVワクチンのキャッチアップ接種の情報を届ける

HPVワクチンの積極的勧奨が差し控えられていた時期に接種機会を逃した大学生が、当事者としてキャッチアップ接種の必要性を訴える活動やキャッチアップ接種を自分ごととして考える呼びかけ、中高生への出張授業などを行っています。

おたふくかぜワクチンの定期接種化を求める

おたふくかぜワクチンは、依然として任意接種であり、感染により多くの合併症のリスクがあります。おたふくかぜに罹患して難聴となった当事者とそのご家族が立ち上げた「片耳難聴の会」では、同じ経験を繰り返さないために製薬企業の社内研修会や疾患啓発動画を通じて、おたふくかぜワクチンの定期接種化を強く求めています。



片耳難聴者の現実に目を向けてください

▲「片耳難聴の会」当事者が高校生在学中に作成したポスター

知られていない麻しんのこわさを伝える

麻しんは、感染力が非常に強く、免疫がない人はほぼ100%発症し、高熱や肺炎・脳炎などの重症化のリスクが高いVPDです。「SSPE 青空の会」は、麻しん感染後、数年～数十年後に発症する致命的な中枢神経疾患（約10万人に1人）である「亜急性硬化性全脳炎（SSPE）」の患者会です。SSPEの認知度を上げることで、麻しんのこわさを伝えるとともに麻しんの唯一の予防法としてワクチン接種率の維持向上を訴えています。

多様な患者会の活動

患者会は、VPDの社会的理解の促進において、極めて重要な役割を担っています。前述の制度への働きかけは、厚生労働省や自治体への要望書提出、大臣との面談など、粘り強い対話を重ねることで、改善へと導いています。

また、患者会活動の主題ともいえるのが啓発活動です。メディアへの働きかけやSNS・ブログ・ウェブサイトでの情報発信を通じて、VPDやワクチンに関する正しい知識の普及に努めています。当事者だからこそその視点でわかりやすく伝えることで、社会全体の理解を深めています。

さらに、感染後に後遺症や障害を抱える当事者同士の交流の場づくりも重要な活動のひとつです。同じ経験を持つ人々が集まることで、情報の共有と拡散が自然に起こります。孤立しがちな経験者や家族がつながり、情報を共有し、精神的な支えを得ることで、活動の継続力と広がりが生まれています。

医療者や教育現場との連携も欠かせません。当事者の経験や視点を医療関係者や次世代の学生に話すことで、知識としてではなく、VPD予防に対する意識の醸成にもつながります。

そして、制度の導入後も、接種率や周知状況のモニタリング、現場の課題の把握、改善提案などを通じて、制度の実効性を高める「市民のチェック機能」という働きもあります。そこには、患者会の目標が、制度化ではなく、VPDによる死亡や健康被害を減少させることだからです。



▲CoMO（世界髄膜炎組織連合）の「世界髄膜炎デー」に連動した啓発イベントで大阪城をライトアップ

患者会の伝える力

患者自身や家族が語る体験は、数字や制度の説明では伝えきれない「リアルな重み」を持っています。たとえば、細菌性髄膜炎から子どもたちを守る会の「ワクチンで予防できると知ったときの悔しさ」は、接種の必要性を強く訴える力があります。SSPE青空の会のSSPE発症後の変化は、あらためて麻しんの怖さを実感させます。こうした語り、一般市民や医療者、メディアの心に届く。これが患者会の伝える力です。

当会が開催するメディアセミナーでも、患者会の方がご登壇されると雰囲気が変わります。科学的根拠に基づいた「正しい情報」だけでなく、そこには「感情」「経験」「患者の視点」という非常に力強い社会的メッセージがあるからです。時には、カメラマンが涙を拭いながら撮影していたり、参加の記者さんが声を震わせて質問したりする場面もあります。患者会の言葉がメディアの心を動かし、メディアが力を発揮して社会を動かします。

患者会の力を結集して社会を変える

2011年、「すべての希望する子どもたちにワクチンを」をスローガンにした「ワクチンパレード」が始まりました。今年で16年目となる恒例イベントで、六本木から日比谷まで複数の患者会が沿道の人に文字通り「声」を届けながらパレードします。例年、厚生労働大臣に要望書を提出し、記者会見を行います。



患者会活動の根底には、ご本人や大切な家族の健康や命を取り戻すことはできないとしても、「子どもたちの未来を守りたい」「同じ思いを繰り返してほしくない」といった思いがあり、それが原動力になっています。日ごろは別々に活動している患者会が一堂に会す1日は、それぞれの患者会の経験を共有するだけでなく、悩みを打ち明け、支え合う貴重な機会となります。

VPDの会ができること

風しん排除の認定は、予防接種制度の節目ではありますが、決してゴールではありません。ワクチン接種率が高まり、VPDが減少すると、かえってその疾患やワクチンに対する関心が薄れ、接種の必要性への意識も低下しがちです。しかし、排除状態を維持するためには、接種率の維持・向上が不可欠です。

そのために、私たちVPDの会は、患者会と連携しながら、必要な改善を後押ししていきます。啓発、対話、提言、そして患者会への支援——私たちにできることを、これからも積み重ねてまいります。